

第77回

## 会社訪問

## 万善工機株式会社

会社プロフィール

代表者：代表取締役 三浦明宏

所在地：〒105-0004 東京都港区新橋3-6-5

TEL：03-3591-6211 FAX：03-3591-6213

設立：昭和24年7月

資本金：1,000万円 従業員：20名

工場：八潮工場

事業内容：各種グローブボックス・アイソレーション機器の設計製作、  
各種ドラフトチャンバー・各種実験台・排ガス処理装置の  
設計製作および付帯設備工事、クリーンドラフト・クリーン  
ベンチ等無塵無菌装置の設計製作、各種自動制御装置  
設計製作など

URL：<http://www.manzen.co.jp>

## 万善工機（株） 代表取締役 三浦明宏 氏へのインタビュー

聞き手：南 明則（広報委員） 志智亮介（広報委員） 白濱康彦（事務局）

（取材・編集協力：クリエイティブ・レイ株）

## 産業および研究実験に貢献する

## “ドラフトチャンバー” “グローブボックス” の草分け的企業

— 御社の主な事業内容をお教えいただけますでしょうか。

当社は主に研究実験設備や環境保全関連機器の製造販売を行っております。主要な生産品目としては、各種グローブボックス、アイソレーター、ドラフトチャンバー、クリーンドラフトやクリーンベンチ等の製品です。

製品は大手企業などからの受託生産が7割、自社販売が3割ほど。埼玉県八潮市に自社工場があり、設計から製造まで自社一貫体制をとっております。



製薬向 充填秤量用グローブボックス

不活性ガス循環精製装置付  
グローブボックスMGP920SZ

真空乾燥器付グローブボックス

不活性ガス循環精製装置付  
グローブボックスMGP920SW

— 創業は昭和24年とありますが、会社の歩みや万善工機という社名の由来など、簡単にご説明いただけますでしょうか。

会社としての創業は昭和なのですが、社名を辿ると、明治の半ばにさかのぼります。そのころ、私の曾祖父である三浦善蔵が、愛知の三河地方から上京し当時徳川家の土地であった現本社地を借り受け「萬屋」(よろずや)の屋号で雑貨商を始めたのがルーツです。その後、2代目である祖父、三浦忠太郎が萬屋善蔵の二文字を取って屋号を「萬善」と改め、戦前・戦後を通じて永年ブリキ屋を営んできました。そして昭和24年になり、萬善工業所として会社を設立。昭和38年に現在の社名である万善工機株式会社と改称しました。

現会長三浦藤三郎に代になると、ステンレス製厨房用品や流し台等の製造を開始。やがて、茨城県の東海村の原子力関連施設において、放射性物質を遮蔽するグローブボックスの需要とともに製造を開始しました。

このように当社は板金加工からスタートした会社であり、現在は、医薬、半導体、バイオ関連企業を始め幅広い分野の研究・製造機関で使用されるグローブボックスの製造を行ない、永年の板金加工で培った技能・技術で信頼の高い製品づくりに取り組んでいます。

— 御社の会社沿革を拝見すると、港区麻布に工場をお持ちだったようですね。

麻布工場は昭和32年に新設したもので、現東麻布の飯倉交差点付近にありました。しかし東京オリンピックが終わるころになると、公害が社会問題として取り上げられるようになり、麻布の周辺でも板金の音がうるさいと言われるようになったようです。

そこで移転を考えたのですが、茨城県東海村には原子力関連施設、筑波には学園都市ができるということで、その方面で工場の土地を探し始め、最終的に埼玉県の八潮に工場を建てることになりました。八潮工場が操業した昭和44年ごろは電車も高速道路もなく、不便な場所だったのですが、今では徒歩



八潮工場

5分の場所につくばエクスプレス八潮駅もでき、当時とはだいぶ様子が変わってきました。

— 同じく会社沿革には、平成元年「自己洗浄装置付ドラフトチャンバー実用新案登録」、平成11年「ドラフトチャンバー簡易型洗浄装置特許取得」とあります。この分野の草分け的な存在と言えるようですね。

当社でドラフトチャンバーを生産するようになったのは、昭和40年前後でした。最初は木製や、木製と金属のコンビで作っていた物もありました。“公害・環境汚染”が取り沙汰され始め、ドラフトチャンバーから排気されるガスを浄化する洗浄装置付ドラフトの製作・開発を始めたのは、それから数年後です。

グローブボックスも原子力関連施設や重化学工業といった産業で需要が高まってまいりました。時代と共に様々なご要求が出て、今では、グローブボックス容器内の水分・酸素濃度を1ppm以下にコントロールする不活性ガス循環精製装置付のグローブボックスが要求されており、主力製品のひとつとなっております。また、医薬向では高活性物質を取扱う、グローブボックス、アイソレーターの需要とともに、ハード・ソフト面に対応できる体制を整えてまいりました。

— これまで強く印象に残ったお仕事あるいは出来事があれば、お聞かせいただけますか

20年ほど前のことになりますが、取引のあった

エンジニアリング会社が製薬プラントを建設するというので、当社に10数台のグローブボックスの注文がありました。その中の1つに、間口2.4m、奥行き1m、本体を含めた全体の高さが2mほどの大型のグローブボックスがありました。

当然、事前に搬入経路なども確認し製造に入ったのですが、なんと途中で建物の仕様が変更になってしまい、搬入ができないことが分かったのです。作り直しかと内心思いながら先方と何度となく打ち合わせを重ね、漸く結論が出て、製品を半分に切断分割して搬入することになりました。しかし、切断すると言っても、容器は3mmほどのステンレスですし、ガスバーナーで切断する訳にも行かず、ジグソーで慎重に切ることにしました。

また、分割容器を元の形にするときも、切断した箇所を直接溶接するとステンレスが熱でゆがむ心配があったため、予め切断部分にフランジを溶接して、搬入後に合体させ、その合せ目に帯状の板を溶接して極力凹凸のない様に仕上げるという作業を行いました。その一連の作業を、納品先のクリーンルームの中に仮設テントを作り、グローブボックスが排気型だったので、その排気設備を使って粉塵等を外に排出しながら行いました。

搬入ができないと分かったときはどうなるかと思いましたが、無事納期にも間に合い完納できました。苦勞した分、印象に残る仕事となりました。終わったときの達成感が大きかったのを、今でもよく覚えています。

— 三浦社長の社長就任は平成10年とのことですが、就任以来、経営上困難だとお感じになった時期や出来事などはございますか。

平成10年の社長就任から10数年が経ちましたが、先代社長である現会長が道を作ってくれていたもので、今、振り返ると、経営者としては恵まれた環境の中でスタートを切れたと感じています。しかし、苦勞しているという、やはり今でしょうか。日本全体が置かれた環境、経済状況もあり、難しさを感じています。

— 貴社の経営方針や経営理念をお聞かせいただけますか。

私たちは小規模の会社ですので、量産品では大型設備の整った企業には太刀打ちできません。ですので、当社では、小企業のメリットをフルに生かし、経験豊富な技術者と熟練した技能者が一体となり、お客様の要望を十分に採り入れた設計は基より、製作・製品検査、現地バリデーションテストに至るまで自社で一貫して行ない隅々まで行き届いたサービスと製品をご提供して行き、お客さまに当社を選んで良かったと言われるように努力を続けていきたいと思っています。やはり、私たち製造業者というのは、お客さまに製品を使っていただいて、「いい製品を入れていただいた」と言われたときが一番嬉しいわけです。

— 今後の目標などをお聞かせいただけますか。

現在、受託生産が主流ですが、自社販売の比率を増やしていきたいと考えています。正直なところ、当社は営業力が強くないので、協力していただける販売店の力をお借りして、自販比率を上げていきたいと思っています。

また、会社の歴史は長いのですが、当社は知名度が高いとは言えず、そのためWebの充実やバナー広告なども活用し、知名度アップを図っていこうと考えています。

— 製品開発はどのように進めていくのか、この点では、どのようにお考えでしょうか。

永年にわたりお客さまから注文をいただいて設計生産を行ってきましたが、お客さまの注文に応じていく中で、これは良いというアイデアが出てきました。こうして蓄積してきたノウハウを製品づくりに活かし、付加価値を持った製品を送り出したいと思っています。

今、当社ではグローブボックスに力を入れており、自動制御装置付きや不活性ガス循環精製装置付きのグローブボックスの新製品開発に取り組んできました。不活性ガス循環精製装置はグローブボックス溶

器内の雰囲気低水分・低酸素状態に維持する物で、また、不活性ガスの消費を少なく抑えます。グローブボックスと不活性ガス循環精製装置として、より置換効率の高い製品の改良・開発に取り組んでおります。

また、グローブボックスは、例えば30年前と基本的容器構造はあまり変わりませんが、ソフト面、検査・バリデーションなどは昔とはずいぶん変わりました。要求仕様も高くなり、製品検査も厳しくなっているので、そのような基本的な性能の追求も欠かせないものになっています。

— 座右の銘、愛読書、敬愛する人物、心がけているモットーなどがあれば、お聞かせいただけますか。

子供の頃から耳にしていた言葉があり、座右の銘といわれると、「堅忍不拔」という言葉を思い浮かべます。私は生まれも育ちも、本社のあるこの新橋で、通った小学校が桜田小学校といいますが、この小学校は20年ほど前に統廃合でなくなりましたが、明治の中ごろに創立した古い学校でした。

その校歌の歌いだしが「堅忍不拔の礎に」というものです。堅忍不拔とは、どんなことがあっても心を動かさず、耐え忍びなさいという意味です。ふだん使われることはほとんどないでしょうが、若乃花が横綱に昇進するときの口上で、この言葉を使っています。小学生のころは意味も分からず歌っていましたが、大人になって、改めて大切なことを表している言葉だと意識するようになりました。

— 三浦社長はスポーツなどは好きなのでしょうか。

スポーツというと、月に数回はジムに通っています。子供のころから体を動かすのが好きで、1週間も運動をしないと体が重く感じるがあります。

また、現会長である父がスキーが好きだったこともあり、

私も小学生のときに連れて行かれたのをきっかけにして、永年スキーをやっていました。30歳を過ぎたころゴルフに代わりましたが、ここ5年ほどは、再びよくスキーに行くようになりました。

夏場のマリンスポーツも好きで、ウェイクボードにも出かけます。海にも行きますが、東京ですと、豊洲の運河でウェイクボードができます。モーターボートに引っ張ってもらい水上を疾走するのは、まさに爽快な気分です。

### 新渡戸稲造の『武士道』を読み 道徳の大切さを改めて考える

愛読書と言えるほどではないのですが、最近、新渡戸稲造の『武士道』を何度か読み返しています。この本に出会ったのは、最近、世の中の道徳やマナーが軽薄になっているように思い、道徳の本を調べていたときでした。

『武士道』は哲学的、宗教的なものがあり、なかなか理解するのが難しいのですが、再び読み返したくなる本です。武士道が儒教の徳目に影響を受けているといった話を読みながら、現代を見回すと、儒教の徳目が今の時代にいかに欠けているかを痛感し、これをもっと大切にしていかなければいけないという気持ちになります。



本社ショールームにて、▶  
南広報委員にご説明される三浦社長